月を仰いでなげくのみ。燒けざるところはまた燒くべし、燒けたるところへ避難せよと命じ又家を出づ。

三日。　歩きなれねば疲勞日々に加はり來る。家にかへれば親族の避難者來れり、水なし、米なし、ろふそくなし、芋かゆ、小豆かゆ、いろいろにくらふ。枕行燈をともす。

信州よりもらひし蕎麥など、この中の贅なり、餘震は絶えず來る。

月影やことことをどる鉢の花
にはたずみきらきら震ふ一葉哉
いきものに芋かゆわかつ朱椀哉
新芋にけふの命を惜しみけり
淺草花屋敷のあとには動物と人間と入かへになりて住めるもおかし。
虎の檻に芋を食ふなり一家族

上野の山清水堂のほとり夫も子も失ひし女の狂ひて縊死せりとかや。

しののめの上野の山のちぢろ虫

餘震

人間を燒く臭ひが天地にこもつたことである。被服廠や吉原の人を燒く臭ひが飛行機上の鼻も襲ふたさうだが、下界にゐる私たちは猶更たまらなかつた。どこにいつても火葬場の臭ひがした。

◆

モーターボートで大川をのぼつた。燒けた上に水ぶくれになつてゐる人間が燈籠流しのやうに沖へ沖へとながれてゆくのをみた。五十や八十の人間のながれるのを見ることはわけのないことである。惡食と負けずきらひの私も東京灣でとれる魚を食べる氣がしない。まぐろの腹から人

間の骨が出てきさうな氣がする。

◆

水たまりをみてゐると地が震ふ。光つてゐる水たまりがガラスにヒビが入つたやうにキラキラと裂けるのである。

◆

芋のかゆを食つた。玄米のかゆも食つた。玄米に白米を少しまぜて小豆を入れておかゆにする。うどん粉をいれておくとねばりもあり食べよい。

玄米はよくうるかしてライスカレーにするとうまい。印度のジョホールで食つたカレーライスの齒ざわりである。

◆

何といつても樹木の力には火も地震もかなはない。淺草の觀音樣の御利益はしらぬが樹木の力は恐ろしい。

若々しい樹木は讃美すべきかな。

◆

燒けのこつた樹木の群に對すると孟春新綠の候をおもはしむる。こげた葉が落ちていきいきと新生の芽を吹いてゐるからである。

◆

九月以來一度も陶器を燒かない。二三度燒きたくつてたまらないことがあつた。

身神激動の亢奮が生む藝術的衝動かしら。

何しろ燒きたいときはたまらなく燒きたい。我慢といふことをしらぬ私も今度といふ今度は我慢させられた。(甲府の旅の宿かりんの實の落つる窓にて)

——以上一二・九——

子の春

先年の出血から、まい年くれになるときつと鼻から血が吹く。ことしは割合に少なく松の内もしづかにひとり屠蘇をくめたのであつた。くめたといつても三ケ日を通じて一本半にもならうか、思へばおもへば年をとつたものである。

年をとつたといへば昨年中は自分の年を一つまちがへてゐたことである、一つ多くまちがへて、いつからどう思ひちがへたのか三十七歳で押し通して、人にもいひ宿帳にもかいたものである。それがくれになつてどうしたはづみか「來年は三十八だなあ」と嘆聲をもらしたものだ。妻君はそんな事はない三十七といひ、私は八だといひ結局二日間にわたつて妻君が計算して私は三十七歳であつて滿三十五歳何ケ月になる、年が明ければ生れ

た年の子の數へ年三十八になるとわかつた。

自分の年を忘れるなんて忘れるに事を缺いて――とわらはれても實際まちがへてゐたので、自分では年を一つ儲けたやうな氣がし同時に正月がきても舊衣依然たる氣がする。

それにへんなことには、へんな政變があつたり元日早々自殺するといふ豫告を受けたりした。知らない人から女房に捨てられたから死にたくなつた、死ぬるつもりで諏訪湖畔にきた、などと弱氣な手紙が賀狀といつしよに舞ひこんだものである。あたたかで陽氣も亦へんである。

しかしやきものの方には都合がいい、割合に土の乾きが早いし、かまを燒くにもよい。三日に初めてかまに火を入れた。

初窯の三つはぢけて一壺かな

身邊雜事

南京ちやぼ來る、雄はことに見事也

軍鷄の爪鋸でひき切る若葉かな

鬼城翁と通話器にて會談中籠の駒鳥のなく音、翁の耳に通ふ、あはれこの駒鳥も震災に餌なくて死にゝき

こま鳥をしかときききけり　聾鬼城

北京ちやぼ來るや其夜死す

いきものをめでては殺す大暑かな

房州岩井の濱に妻子を訪ふ

夕立にけぶる砂はましづけさよ

夕立に波と草とのけじめなし

避暑宿のこの金佛は我子かや

日燒してうすき髭もつ女房かな

瓜畑に棕櫚一本の月夜かな

煙草の通語をはじめて覺ゆ

花つけて天葉きほへる煙草かな

土葉は芥中葉は虫や旱煙草

佐原水鄕にあそぶ、井水惡しく霞ヶ浦の湖心に水をくむ、これ女のわざ也

夜ふけて湖まだ冷めず島祭

水舟は女ふたりや行々子

水をくむ女に月の湖心かな

水舟の樽にさしたるあやめかな

眞こも刈櫂やる女のけぞりに

秋田、弘前に旅す

むら芒八郎潟のほとりかな

かたまつて芒の上の歸帆かな
刈田人晩歸の舟と呼びかはす
花蕎麥の上をながるる狹霧哉
ちらちらと花もちそめぬ萩のむら
井戸堀るや萩にかたよす石燈籠

喉頭をいたむ

かまつかに痰吐き切つて快し

瀬戸の在品野といふにゆく、陶家の人すべて俳人也

尾張の國にはじめてねまる白露哉

岩屋堂といふにゆく、紅葉の名所也、茶店の娘は句をよくす

一つ家に菊女がすめる紅葉かな
片瀨波ながるる紅葉押し戻す
瀧壺に紅葉あかさや沈むまで

岩代飯塚溫泉にて

崖の氷柱摺上川に觸れんとす
大瀞に岩の氷柱のとどきけり

やきものゝことなど

相變らずやいてゐる。ヒマさへあればだが――なかなかそのヒマがないので朝四時頃から起きるのである。腹はよくへる。土を揑ねてゐるとずゐぶん腹がへつてくる。窯に火を入れると二日醉の妙藥で、しんしん痛むあたまも直ぐ治るが近頃はその二日醉もないのでストーブ無用のぬくもりに好適だ。一窯すむ頃が出勤時間になる、馬鹿に血色がいいなあ――などと言はれることもある。

珍品はあつまらぬが同好の人々の燒いたのがいろいろあつておもしろ

い。瀬戸在の椿窯のあとから發掘された斷片や乾山らしいものなど一寸見やうではおもしろいものである。

書齋兼應接兼寢室の八疊敷がやきものでふさがりさうである、やきものの中に寢つ起きつするのもおもしろく、やきものの顏の變化をみてゐるのもおもしろい。

光線の關係やお天氣の工合でやきものの顏がいつも變るのである、やきものは立派な顏をもつてゐて、主人の愛撫を受け、主人にいろいろの口をきくのである。

自分の燒いた雜々然たるやきものの中に小さな支那の壺を一つ置いたときにその壺があまりにいい顏をしてゐるので自分のがイヤになつてしまつたことがあつた。こんどもそれらの斷片を何の氣なしに形のみ堂々たる自分のやきものの間に捨てておいたところが自分のが忽ち色を失つてしまつた。乾山といひ又藤四郎の手に觸れた破片やらどうやら分らな

いのだが時代の色は如何ともすることが出來ない、寸に足らぬ破片のために尺に滿たんとする自分の藝術？　が瞬時に光澤を失つてしまうのである。恐ろしくなつた。

柱に古風な時計が一つ殖えた。岡田三郎助氏にねだりにねだつてもらつた江戸時代の時計である。糸をひいておくとこの古時計が悠長な時をきざみ、時がくるとチーンチーンと間隔を置いて時を打つ。その音は何百年前のひびきであつて、その昔は仙臺萩の御殿のやうなところでこんな音を立ててゐたのかもしれない

この時計に支那のやきものなら古いものとして調和がとれるのだが自分のはどうもいけない、新らしい生命を自分のやきものの中につかみ得たら或はどうにかをさまるかもしれないがまだまだ自分のはなまなましてゐる。

熱でやいてみたい、土とかくすりとかに囚はれずに心の熱でやいてみた

い。町のなかで近所を遠慮してびくびくしてでなく誰はばからぬ廣野で思ふさま火を入れてみたい。山の噴火くらゐに火の柱を立ててみたい。

しかしそれは、一生かなはぬのぞみかもしれぬ、かなはぬのぞみと知つても淋しくはない。心の火には不斷の油をそそぎ得るにちがひない――いやそれを祈つてゐる。

◆

こんどの强震も何のさはりもなかつた、みんな起きもしなかつた、せとものも落ちたがわれなかつた。

ペルシヤの古陶「はとはな手の小壺」を得た、千年の歳月を土中におくつた小さなせとものは何の疵もなく私の目の前にある、ガラス體のうはぐすりは眞珠のやうな色と艶とをもつまでになつてゐる、小さいけれど私の珍寶であるこれも有難いことには强震のさはりがなかつた。

いま大阪の堂島ホテルの七階の一室にゐてこれをかく――朝靄の下に

雜音がこもつてゐる、日が靄を照してゐるがもやの下の家並はみえない、雜音のみもやをぬけてきこえる――私はこれから友人のところへ寄つて紹興酒のかめをもらひ夫れを汽車にもちこむ腹ぐみである。

正月景情

餅搗の臼がくひこむ焦土かな
燒煉瓦たたみて据ゑぬ雜煮釜
日比谷公園池のほとりの雜煮かな
毬つくやあそぶ羊の右左
毬ついてこのバラックのせはしなや
廻禮の鼻さきにあり雜煮鍋
バラックに赫灼とあり大羽子板
追羽子やガードの下の姉妹　以上――一三・一――

感激

久邇宮家から御成婚記念の銀盃一對を拜受したことは身にあまる光榮であります。

山階宮武彦王殿下から二月のあるゆふべ、お召を蒙つて御陪食仰付けられました。殿下と同じテーブルであつたのでいよいよ恐懼しました。五月にもお召をうけましたが八戸大火救援に向つたので辭退いたしました。深いお思召にいつも痛みいつて居ります。

澄宮殿下には大毎慶應の野球戰のあつた雨の落花の日、新宿御苑で久方振で拜しました。女官から震災直後「小野は無事だつたか」と御言葉があつたといふ事を承はつて全たく感激の涙にくれました。わづか二日御運動のお供をした位に過ぎない卑賤な私、しかも御こころにかけさせられて

——まだ御幼年ながら下々の上を思ひあそばす有難さに泣いたのであります。私は御附の方まで御見舞の手紙こそしたれ、參殿もしなかつたのであります。

荻窪生活

かねて郊外荻窪に五百五十坪ばかりの土地をかりておいた、そこに漸くささやかな新居が出來たので五月末日引越した。

省線電車(中央線)荻窪で下りて川南ときけばわかる丘の上、田圃をぬけ小川をわたるとすぐ——山本拙郎氏の設計してくれた赤瓦の家がみえる。

麥が刈られ樹が植ゑられて漸く住宅らしくなつた、ひよろひよろした杉が十四五本、高野槇、一位の木、かへで、ひいらぎ南天、錦木、檜、くさぐさのものが植ゑ込まれたがなかなか青くならない。それでも夕方富士山の姿がくつ

きりと森の上に浮くはうれしい。

夜明から暮れるまで雲雀がないてゐる、雲雀に起き雲雀に寢るのだ。うるさいほど啼く。

魚、肉、氷、日常雜貨など一寸不自由だが豆腐屋のラッパもなるし自動車も通る、新聞社へは五十分、まづ今までの西片町から通ふのと大差はない。朝はやく武藏野らしい森や原をぬけぬけ歩いてゐると次第に靄が濃くなつて自分の家の方角を失ふなど一寸市中で得られぬうれしさである。

引越さわぎがまだしづまらぬので窯にまで及ばない、しかしこれからは庭がうんと廣いので盛んに火の手があげられる、火事を出したところで自分の家だし近壁とははなれて居り悠々と薪を焚くことが出來るといふもの。

ペルシヤ古陶を二個得ることが出來た、手に入つた日和田三造氏、大隅爲三氏、原石鼎氏偶然いつしよになつてよろこんでくれた、そしてこの一夕の

會が西片町の家に對する別宴ともなつた。

洋行からかへつて家がなく辛うじて住みこんでから五年、震災をはじめいろいろの事柄があつた私としては隨分思ひ出の多い家である。襖にかいた私の畫もそのまま殘して來た――あとへ入つた人には迷惑であらうけれど、私としては殘しておく氣になつた。

新居にほがらかな日がつづく、しかし依然として旅がつづく、旅に出て旅からかへる、そこに新居と自然とがまつてゐてくれる、隨分祝福されてゐるやうだが矢張荻窪も人間の世界でくるしき思ひと借金の絶ゆるひまのないことは昔も今も同じである。ただ窯中莊嚴淨土あるのみ。

雜草

土浦客舍（二句）

春寒き障子なでくる按摩かな
うす霞む筑波に徑やありありと

賜銀盃

白梅や二つならびて恩賜盃
桃畑の明るさ奪ひ雪の富士
夕づつや桐の嫩葉の楓ほど
戸を閉めし縁になほある落花かな
明易き若葉の中の竹の影
苗代田の電柱のぼる工夫かな

陸中厳美溪は天下の景勝也、鈴をひけば怪巖のあなたよりカゴ網をつたひくる、中に石盤あり、欲するものを記せば

瀧の上團子渡りくる若葉かな

京都

髪結は花の祇園の鳥居前
残雪の上に陽炎燃え立てり
春泥に牡丹の蕚をほぐしけり
春泥にまぢる陶土を惜しみけり

破籠子氏が植えくれし牡丹さく一輪也

緋牡丹の一片いまだ蕊を蔽ふ
漸うに蕋をみせたる牡丹かな
牡丹ちるや一片かむる古香爐

新居

新宅や穂麥畑の隅一ト畝

伊勢參宮(二句)

五十鈴川の鮎人おぢぬ若葉哉
内宮や磐石かざり苔の花

打水を舟にわかつや芒越し

雜事

霧雨が降る。森をいぶし、杉をくもらせ、果てはわが庭の立木までふやけさせる。

紅楓二樹、霧雨のなかにしほたれてゐる、まるで時雨のやうである。

糸瓜をパアゴラのかげに移植したり、コスモスを起したりしてゐる間に霧雨も晴れて玉巻く芭蕉の上にほがらかな夏の日がのぼる。武藏野に住む有難さはここにある。

旅と仕事にかまけて窯にまで及ばない、土も漸く雨露をしのぐ小屋に入れられるやうになつた位で、まだ燒くどころか揑ねることも覺束ない、それでも絶えて久しい土いぢりをしたい願望はしばしばおこつた。

六月二十九日、朝から友だちが集ひよつた。木原店からすし屋がきて握つてくれた、樂燒をやらうといふのである。總勢三十名、おもひおもひに素燒にかいた。岡田三郎助氏もかいてくれた、石鼎氏も、又、家の設計をしてくれた山本拙郎氏もかいてくれた、誰々彼々みんな書いてくれた。新聞記者、役人、畫家、彫刻家、俳人、料理屋主人、地主、飛行家、宗教家、その他。

窯の方は鳳來氏と張散氏がやつてくれた。カマのまわりをみんなとりまいた。武藏野の原の中の火いぢりは誰もとがめない、どんどん焰は立つた。五六十も燒いたことだらう、鳳氏も張氏もへとへとになつてゐた。

夜深うしてみんな散會した。大輪のダリヤと月下香とが壺にさみしくのこされた。

糸すすきコスモス植ゑて明易き

あくる日知つたことだが鬼城翁が上京中であつたが歸られたことだ。長女の夫を先きに失ひ今又二女の夫を亡はれたのである。アトリエもみ

たいが、泣ツ面をみせるも禮にあらずと思つて今度はかへるとハガキにあつた。

この家に越して禍福がすでにあつた。女中禍と泥棒禍である。東京といふ名にあこがれて來る女中さんが武藏野の土臭い中にねるさびしさもよくわかる。泥棒は戸のガラスをこわして其音に自ら逃げた。

福は先づ陶福があつた。不思議にも一日にして三個の繪高麗が手に入つた、其の一つの如きは高さ三尺にあまる大甕である、數千金に價するものが數十金で手に入つた、ただし好事家の忌む底キヅがあるからである。陶福はまだあつた、秋田の那波良助氏から六兵衞の手づくね羅漢をもらつたことである、素破らしい土のつかみ方にみんな感心してくれた。

も一つ猫福があつた。大毎の奥村不染氏から埃及猫の子をもらつたのである。紫陽花の色をした眼をもつ雪白の猫の子はみんなから褒められ

た。わが家に過ぎたるものは正にこの猫兒と繪高麗と羅漢である。

あの森のかげだらう、あの火の見のそばだらうと、たづねてくる人は道を迷つて、原のなかをうろうろする。氣の毒ではあるが之れも御馳走である。

荻窪の驛で電車を下りたならば直ぐ驛前にそば屋がある、その横丁をどこまでも南に下るのである。道の兩側はしばらく住宅がつづく、住宅が途絶えると杉の森になる、やがて田圃に出る、今は田を植ゑてゐる、蛙がやかましくないてゐる、小川がゆるく流れる橋をわたる。澄み切つた水で水草やら目高やら明らかに見える、それから丘に出る、もう赤い瓦の屋根が見える、それがわが家であつて——驛から十分の道のりである。

どうぞお出で下さい。じやがいものとりたてをふかして進ぜます。

◆

若竹を二本もちけりおかめ笹

蘭の尖をそるる猫や夕簾

移し植ゑてはやも玉巻く芭蕉哉

コスモスの芭蕉玉巻くかげにかな

苦笑

花さいて胡瓜としりぬへちま棚

—以上一三・六—

その後

すゐぶん旅行しました。新潟へ、秋田へ、また新潟へ、鶴岡へ、大洗へ、沼津へ、大阪へ、京都へ、奈良へ、函館へ、札幌へ、小樽へ——いろいろの見聞もありましたが少閑をぬすんで奈良へ、しかも博物館のみの半日はまたとない怡楽でした。

秋に入つて東京近くは隨分歩きましたが遠くは米澤、山形、秋田、弘前、青森

とあるいたことです。山形で紅葉のちりがてなのを見て秋田晴朗、弘前風雨、青森飛雪など、また興趣がありました。

旅中の句は多く逸しましたが、御迷惑でも思ひ出にうろ覺えのみ記させていただきます。

柿崎や洲濱へつづく等草

新潟所見二句

御僧の自轉車でゆく柳かな

濠川や女觸れゆく西瓜舟

青森函館間連絡船二句

梅雨雲の切れ目の星や恐山

梅雨雲の下に函館灯りけり

函館驛近くの茶屋にて二句

奥蝦夷も内地もしらず夏女

錢をよむ女あるじや夕すだれ

定山渓

茂みより蜘蛛を狙へる雀かな
荒天や葎の中のきりぎりす
磯風にしのぶをつるや高廂
浪一重糸の切れたる鰹かな
鰹つるや首を埋むる肩の瘤
鰻釣つてたたきつけたる芒かな
露の庭かまつかと岩ばかりかな
草蔓の杉まき切れで枯れにけり
山主の山に柵結ふ紅葉かな
夜の秋やししむら動く大鏡
稲波に浮きゐる桐の一葉かな

瀧口の岩にわかるる芒かな
雲よりも雲影濃しや雪の富士
大瀧のかがやき落つる野分かな
引あげて舟うつぶせや枯柳

私事

荻窪の住居も漸く馴れました。樹を植ゑたり石を置いたりしてゐる間に畑の大根はふとり白菜もちりめんしわを寄せはじめました。

隠元豆、なた豆は大收穫でした、ほうれん草は失敗、唐もろこしはすてきでした。とり立てのを食べるうまさは格別です。鶏の雛が死んだり育つたりする間に大根はいよいよ逞しくなりました。大根をぬく面白さ、たまには尻持もつきます。澤庵も漬けました。

裏の地所が借られたので六百坪近くになりました、そこにある藁小屋を

六十圓で買取ることになりました、八坪の小庵ですがこれに爐を切り窓をつくり壁の代りに下手ながら私の描きサラサをつることにしました。六十圓に因んで「綠樹園」と命名しました。俚耳氏が名づけ親です。

富士越しに屋根土投げぬ日輪草

附近にどんどん家が建ちました。富士は秋になつて殊に美くしく見えます。一夜にして雪をかぶつた富士を見たときは總身ふるへるほど感激しました。

コスモスの中に枝張る小松かな

猫のゐるコスモスの根の夕明り

コスモスが二百坪ばかり茂りました、睡蓮もよく咲きました、眞夏から霜が降るまで咲きつづけました、驚かれたのは池が凍てても莟がひらきかけたことです。

芒は痛快でした、二三十株植ゑたのが風にそよぎ月に光り雨に動きました、穗が出ても花やかですし、枯れがれになつても猶花やかでした。刈つてしまふのに二日かかりました。

通ひ路や錦木の枝結ひたわめ

咲き切つて葉の逞しきダリヤ哉

大蘭に日南ほしさや庵の秋

霧の中に蜘蛛動きゐる日の出哉

遲月に雲出てうすき夜寒哉

牡丹の芽靑めるままに冬立ちぬ

初冬や庵をとりまく木々の相

夏、面瘍を病み二ヶ所切開しました。新潟旅中きざしかけたのを無理したからです。

日燒せし面皮しづかにメスを待つ

日燒して刀創もつ面皮かな

冬になつて千葉旅中腕車顚覆し頭、腕をうつたことも災の一つでした、師走近隣から出火して垣根を破られ草花の芽も牡丹の根もふみ荒されたのも災ひでした。しかし破籠子氏が植ゑ去つた二株の牡丹は助かりました。

窯はなまけました。それでも荻窪で四五回は火を入れました。秋田と東京で同好の人々にお目にかける機會を得たのは私として印象すべき出來事でした。

エヂプトの猫いよいよ大きくなり野性を發揮すること猛に、襖は爪のあと、壁は泥足のあと、冬になつても戸外に雪のやうなからだを晒してゐます。月明樹をよぢのぼる大白猫の凄い美くしさを思つて下さい。犬は舊年來の狆が老ひ新來の駄犬が跳躍してゐるのみです。あとは鸚鵡一つです。

初冬の日かげれば鸚鵡物置に

新春

溫室や寒暖計と輪飾と
漸うに子の食ふ雜煮一つかな
輪飾をつけてゆゆしや花鋏
ひとりゐのひねもす屠蘇をまゐりけり

應擧の鶴

たのみなき一幅かけてお元日
どたどたと五つかたまりの賀狀かな
三千の賀狀の前に醉ひにけり
乾隆墨にむだ繪をかきし試筆かな
飾海老細かくうつす試筆かな

初日影六十圓の草の庵
池の氷割るおもしろし松の内
水仙や一塊にして花二十輪
若水をわかつや鶏、猫、犬、カナリヤ
雪割草ひげのみ見せてふくらます
庭石の根におろしけり雪割草

草庵床の間なし

北風や壁にかけたる描き更紗
爐を切つて茶釜まだなし草の庵
紫紺染かけて色めくこたつかな
わが庵や木立の外は凧あげ場

自嘲

後庭、牡丹三株、松三本
鸚鵡一、猫二、犬二、仔鶏九
前栽、八つ手、錦木、木犀、梅
大窯一、小窯一
園内小池に蛙眠れども其數をしらず
コスモス、カンナ、種子をこぼすと雖も亦數をしらず
一家四人に餅一斗
酒一樽、鴨一羽
かくてわが庵の春を迎へんとす
ただ徒らに老ひて酒氣失せず

感慨時に句にのぶれども十七字成つて更に句なく
土を玩び火焔を揚ぐると雖も一個の五郎八茶碗すら成るなし
義を忘れ誼を缺き孝悌を不盡
我ままーばい氣いつぱい
一切を認めて一切空也
元旦を迎へんとして感懷年々相等し
眼前ただ在り債の事
戯書凡上蟹水仙一塊
いとし子に將棋負けけりお元日

—以上一四・一—

趣味の外人

ある夕方であつた。船は海の上を辷るやうにゆく。始め二三日は機關の音がいつも體に感じてゐたものだが次第に慣れて無感覺になる、海が少し荒れたところで誰もが醉はぬまでになつた。その日は新嘉坡近くの海の上であつたらう。安南沖を通る日などは大島小島が波間に隱顯したので甲板の上も賑つたが、そんな刺戟がなくなると、誰もが本を讀むか、寢る、輪投げをする位で海の單調に默りこくつて了う。

その夕方も皆げんなりしてゐた。私とミーヤー氏とは甲板の一番隅つこに籐椅子を並べてゐた、もう赤道眞近なので、みんな白服であつた、海の夕方の風は陸では得難い快さであつた。

「どちらにお住居でした」と私は聞いた。今まで一寸した言葉を交したことはあつたが、しんみりと話したことはない、私はけふこそ彼の心と話してみたい氣持で一ぱいだつた。

「大森にゐました。ばあやと二人で暮らしました。」

「見物はどちらの方をなさいました。」

「みんな見ました。松島と北海道と臺灣を知りません。名古屋、京、大阪、皆知つて居ります。名古屋の田舍の瀬戸も知つてゐます。山陰道も知つて居ります。」彼は山陰道などといふ名まで知つてゐた。私はいろいろな興味で何から聞いていいやら分らない程であつた。先づ瀬戸へいつたわけを聞きたかつた。

「瀬戸――瀬戸燒を見にいつたのです。私、瀬戸物が好きで世界中のを調べました、日本の瀬戸物もみんな調べました、博物館にいいものがあります、足利時代、桃山時代、みんな調べました、瀬戸も今いいのはありません、しかし、今も瀬戸燒のオーソリチーが一人居ります、その人の生活は面白いです、氣に入ればカマに火を入れます、燒きます、氣に入らねば何もしません。」

彼は手ぶりで蔦色の目に表情を湛えて語り出した。

「瀬戸の初代の技術(アート)は立派です、私、感心しました。なかなか高價いものです。今のオーソリチーが、私がわざわざい賣ってくれません、少ないからです。

つたことを感心して一つ分けてくれました、それは此船の荷物に大切に入れてあります」彼の日本語の調子はなかなかうまい、東北人と話すよりも私に分りいいのである。

「なかなかよく調べましたね。山陰道には何しにいつたのです」

彼は私が不審さうに聞くのが寧ろ不審なやうな顏つきをして、

「ハーンの爲です。ミスター・ハーンの爲めです」といつた。

「さうですか、小泉八雲さんの――」私は餘りの突然に驚いたのであつた。この跛者が八雲氏を慕つてゐやうとは夢にも思へぬことであつた、日本の土になつてゐる此詩人は、日本人よりも却つて外人の間に評判が高いといふことを兼て聞いてゐたが、果してさうであつた、彼が裏書してくれたのであつた。

「あの人は――」と彼は言つた「あの人は私が好きな人です、いいえ、私だけではありません、英語を話す人はみんな好きな人でした、あの人は日本を好

きました、そして日本の人を好きました、日本の人を奥さんにしました、日本の景色を日本の人を、日本の心を詩にしました、そして日本で死にました。私はハーンさんが住んでゐました松江にいつたのです。」

「――」私は默つて聞いてゐた、彼の眼は蔦色に光つてゐた。

「松江のその家は、今學校の先生が住んで居りました。その人も私と同じやうにハーンさんが好きな人です。ハーンさんがゐた時のままに家があります、木も石もあります、本棚もあります、みんな其儘になつて居りました、その人はミスター・ハーンが好きであるから其儘にしてあるのです、私は大變嬉しいことに思ひました。」

西の空のみ明るくて次第に海面は暮色が流れそめた、彼は煙草を吹かしてゐた。私はこの藝術の巡禮者に對して敬意を拂はずにはゐられなかつた。話はそれから又つづいた。日本の婦人の話が出た、景色の話が出た、私はお土産にどんなものを持つてかへるかと聞くと彼は斯う答へた。

「何より瀬戸物が一番です。私の妻は私を待つて居ります、それで妻へは昔の大名の姫様のキモノを持つてかへります、それはウチカケといふものですが、金の糸でヌイがしてあるものです、二百圓で買ひました、京都で――私の妻は喜ぶことでせう、妻は待つて居ります、上海に手紙來て居りました、香港(ホンコン)にも來て居りました、新嘉坡(シンガポール)、彼南(ペナン)、船の着くところ、みんな手紙が待つて居りませう。私、二年、私の妻に會(あ)ひません、私の妻は妻の母といつしよに倫敦(ロンドン)に居ります、ハイドパークの近くです。私はその家で暫く遊びます。」

「日本にまた來ませんか」と私は聞いた。

「日本は好きです、又行きたいと思ひます。しかしそれは私の妻に相談せねばなりません、私ひとりでは分らぬことです」

話は日本の風俗人情に移つた。

「日本の娘さんのキモノは大變いいと思ひます。しかし(彼は誤らずに斯ういふ言葉を使つた)顏色はお白粉を塗らない方がいいと思ひます。何も

飾をしないがいいです。日本人の皮膚に色があつても夫れは天然の色ですから夫れで美くしいのです、お白粉を塗るのは嘘であります。キモノは大變よろしい、次第に西洋の人も眞似をしませう、髪はどうしてハイカラにするでせう？　私は島田、銀杏返し、丸髷、みんな好きです、あれほど美くしい技巧は外の國では見られません、世界に類のない技巧をどうして日本の女は避けるのでせう、ハイカラ――つまらんぢやありませんか」

それから永い旅がつづいた。倫敦近くなつて來た、みんなの話題が盡きて來た。

「彼れは間諜ぢやないかと思ふがどうだ」

「さう言へば餘り日本語がうまいぢやないか。幾ら日本が好きだつてタツタ二年位の間にあんなに上手になるものぢやないよ、きつと昔から日本研究をやつてたんだ。」

「跛だつて可怪しいと思へば可怪しい。軍人で負傷したんぢやあるまいか、軍事探偵なんだぜ、きつと。」

話題のなさから斯ういふ想像まで生れて來た。

「しかし、變と思へば際限はないが、兎に角食へない男ですよ」といふ船員もあつた。

私はしづかに聞いてゐた。日本の藝術品を理解し、小泉八雲の舊蹟を探ねる程の軍人があるなら、幾らでも日本に間諜として來れとも思つた。

しかし夫れは杞憂であつた。ハイドパークのほとりの彼の假寓を訪ふた人の話で、全然杞憂であることを證せられた、彼は依然として日本のよき友であるのであつた。

――八・五――

新潟のやきもの

秋風のなかに百日紅が咲いてゐる。藤棚の藤はもう長い豆をぶら下げてゐるのに庭の百日紅は花をこぼしもせず眞紅である。

逞しい藤である。棚にあまつて蔓は八方に伸びてゐる一本の蔓は座敷の中を覗きこんで客の眼を突くまでに勢ひこんでゐる。秋風が吹くと蔓まで堅くなつてゐる。

床に浚明の紅葉牧童の幅が掛つてゐる、浚明はたしか新潟で死んだ人である、至孝な畫家でそして儒家であつた。親不孝な私が親孝行な黄愼の風前牡丹の圖をもち今枕頭に至孝浚明の幅を仰ぐ。くすぐつたからんや。

濠に柳が垂れてゐる、新潟の濠端は夏もよいが冬もよい。柳のかげを僧侶が自轉車でゆく。

骨董屋が多い、一軒の家では六兵衛の茶碗をみせた、うまいにはうまいが釉藥のかけ方に同感が出來なかつた。餘りに匠氣が多い。も一つ蘭の花をこぼした茶碗をみせた、土臭いろくろだとおもつたら新潟の人が燒いたのだといふ、ある金持が七兵衛をよんで太子堂で燒いた、この茶碗は其の金持の作で明治初年のだといふ。土臭いわけは分つたが糸底などむやみに氣にしてわざわざつくつたやうに見えるのも同感されなかつた。餘りに月並なんだ。

荻窪に引つこんでから窯を焚かなかつたが漸く一日曜火を入れた。釉

薬など探し出すのに骨が折れた、午前四時からかゝつて漸く午近く火がはいつた。

結果はみんな失敗である、疎懶恐るべし。

宿で無茶な瀬戸物を使はれるほど不快なことはない。故意か偶然かいいものをみせてくれたのは上州沼田の一旅宿であつた、名古屋の志那忠支店のは一つ一つ心して使つてある、素的な飯くひ茶碗は京都東山の石田である。

九官鳥が笛を吹いてゐる、宿屋の玄關の小鳥もいいものである。この原稿をかく筆も氣持がよい、宿屋の筆硯はひどいものだ、たまたまきれいな筆硯に對すると我が書齋にかへつたやうな氣がする。

けふは奉天の六轉君に悼辭をかき、此原稿をかき、女學校に講演にゆくのである。旅から旅へと文債をもちあるき猶且つ窯を戀ふ。しづかな月日は到底私にはない。

煤六氏としつてから何年だらう、川越のお寺の句會で行水の句をつくつたのがはじめだから十年以上にならうか、おもへば此雜誌も古いものだ、あわただしい月日は私のみではない。

秋風は藤棚をゆすり百日紅を吹きポプラに及んで其果てを知らず——風邪をひいたのか、机におく双腕に熱氣を覺ゆる。——(俳誌「草」へ)

——一三・九——

枯木山莊より

石鼎さん、おめでたう。とにかく何といつても、けふは元日です。

大晦日の午後、あなたが山莊を去られてから、やつぱり寢てゐました。終日終夜寢てゐました。溫泉につかつたのと、夕飯を一ぱい食べたのと、小便に起きたばかりで、あとは何もしなかつた、雜誌を少し讀んだばかりです。大年の夜にはちがひないが風の音ばかりです、早雲山から吹きおとす風の音ばかりです。うとうとしてゐる間に鼠の音をききました。皿か盃を踏んでゐる鼠の音と、枯木の中に人聲をききました。人聲は橋の向うの別莊を借りに來た人々のやうでした。ははあ大年を逃げて山へ來た連中だなと輕く感じただけで、又うとうとしました。初日の出は見てやらう、鼻血が噴いてもいいね、箱根早雲山の山莊から、谿谷のあなた、相模灘からのぼる初

日の出は見てやらう、太陽を見おろして鼻血を出すのもいい氣持だとおもひおもひ寢ました。

ところがどうでせう、目を覺して時計を見ると午前九時三十分です。時計が狂つてゐるのではないかとおもつて、よく見てもセコンドは正確に刻んでゐます。折角海拔二千尺の山上、初日の出を脚下に見てやらうと意氣込んだのも、例の催眠劑アダリンにすつかりしてやられて午前九時三十分おめざ、おめでたうと口の裡でいつたことです。おめでたうといふのも私自身にいつたことで、聞くものとては山莊の四疊半の壁と障子とトランク位のものです、いや山莊をかこむ枯木だけは聞いたことでせう。

溫泉の加減をみて初湯につかりました。あなたが火傷するほど熱いといつた溫泉もけふは風の關係か左ほどでなく水をうめると恰度いい溫度でした。もうもうとこめた湯氣の中で鼻をかんでみました、九時三十分まで寢たお蔭か鼻血はすつかり止まつてゐました、あなたがあれほど心配さ

れた血も山上の安眠で先づおめでたうです、けふはすつかり止まつて元氣づきました。

石鼎さん、あなたの來訪はまことに嬉しかつた、石鼎氏は來てくれるであらうとは思つてゐました、しかし夫れが本當に來てくれたことですつかり嬉しくなりました。この山中にもいろいろの人は來てくれました、それはどの人にも眞ごころから謝せねばならぬ好意の登山でした。私の病氣を心配してくれる人、私の借金の片をつけるのに相談にきてくれる人、私の宿の心配に來てくれる人、みな心から私の爲めに山に來てくれたのでした。

しかし、あなたの登山は全然超世間的な氣持で迎へられたのでした、石鼎といふ人がもつ世間の臭ひは無論多分にありますけれど、あなたと私との交はりは又ちがつた風味があるとおもひます、尠くも私はさういふ氣持で迎へたのでした。石鼎氏が來た、いよいよ來た、年忘れ、大年を送る氣持は石鼎氏を加へておかう、さう思つたのでした。

石鼎さん、大晦日の一日は、あなたが下山したといふことと、前に書いたあれだけしか此の山莊には事がなかつたのです。あなたがかへる時、前夜枯木の間で寫眞をとらうといふことを約束した、それも氣づきましたが、あの場合外へ出ることも、又そのことわりをいふ事すらも物憂く、堪え難かつたのです。

――ここまで書いたところへ、女中さんがお雜煮をもつてきました。屠蘇二杯、お雜煮一杯(餅二個)御飯一杯半、それでおめでたうです。午前十時半のお雜煮です、どうやらお正月らしいものの山中暦日無しの感があります。明けましておめでたうといふ言葉も何だかうそらしい、主婦が紫縮緬の羽織を引かけて賀詞をいつたり、女中が銘仙の着物に着かへたりしてゐるので、何だかくすぐつたい氣持はしますが、私はあなたが知つてゐる寢卷の上にたんぜんを着たままです。炭をつぎつぎこんなものを書いてゐます、それだけです。障子に日はあたつてゐます、きのふ鼻血の出る私の頭へ日が

照りつけるといつて、あなたが親切にしめてくれた一枚の雨戸も、けふは開けてゐます、あの雨戸のところへ枯木の影がぎくしやくと映つてゐます、寫眞のピントを外したやうに、枯木の影がはつきりせず、恰かも水墨で描いたやうに影が滲んでゐるのもおもしろいと思ひます、山おろしが吹くと水墨の枯木が大ゆれに搖れます。ささやかな風ですと、水墨の畫面のうち枝の細いのだけがゆれます、それもゆらゆらとして、しづかに慄え乍ら畫面のものとのところに止ります。

石鼎さん、「鹿火屋」も全くよくなりました、よく育ちました。あの「草汁」が斯うならうとは夢想だもしないところでした、新年號もすつかり讀みました。大空氏の「ひともしごろ」は素破らしいものです、消息の中でのあなたの褒め方が足らない位だと思ひます。

斯うして山莊にこもつてゐると、いろいろの事を見つけ出します。さつき書いた水墨の枯木の障子に日が直射します、さうして鍵なりに折れた右

手の障子はその殘りの光線が斜めに當るのです。同じ白紙を同じ糊で同じ日に張つたのでせう、同じやうに障子は古びてゐますが、直射する側の障子はまるで硝子のやうに光つて、障子と思へないほどくわつとした光線もあり枯木の影もうつしてゐます。斜めに日をうけてゐる障子は柔らかに光線をうけてしづかに軒の影をうつしてゐます。障子といふ感じは此の方にあります、障子といふ感じはしらじらと立つてしづかに影をうつしてゐる方にあります。

夜もおもしろいことを見出します。私の寢室はあなたと飲んだあの四疊半です、熟睡をとるやうに寢室だけ電燈を消します、茶の間も六疊も電燈が點つてゐます、寢室の闇の中にぢつとしてゐますと茶の間の電燈のあかりが見えるのです、襖をしめてゐて電燈の光線が見えるのはおかしいやうですが實際に見えるのです。隙間からくるのではない、一ぱい光線が漲つてゐるのが見えます。

それは襖の紙の張り方が薄いのでせう、襖の地紙の貼り方が少い爲めなのでせう、電燈の光線が襖にあたると二枚とも襖が肋骨を見せます、襖の心になつてゐるあばら骨が透いてみえるのです。そればかりではありません、壁も亦透いてみえるのです。晝間は卵色の壁だと許り思つてゐたのが、夜になりますと、この壁は土でかためたのではなく紙で貼つてあることがわかるのです。それで襖と同じやうに壁も亦肋骨を闇の中に浮かせます。襖も壁もX光線をあてられたやうに闇の中に骸骨を浮かせるのです、山莊の闇の中に壁と土の骸骨を見つけた私の興味を察して下さい。そして骸骨の幻影ではない。實際を見てゐる私が、風の音をきいてゐることを思ふて下さい、そして私をつつむ襖や壁の骸骨が櫟や楢の枯木にかこまれてゐることを思ひ出して下さい。そしてこの枯木林と山莊とが大箱根早雲山の急傾斜の腹にあつて、二千尺の高さにあることを想うて下さい。此山上の雲と風のあわただしさを思うてみて下さい——この大自然のなかに鼻

血を垂らす小さな人間が一人ゐて、骸骨にかこまれてゐることを、小さく想うみても下さい、その骸骨が野菊を銀箔でちらした模様を飾つてゐることも想像して下さい、銀箔の野菊は襖紙の模様です、電燈に浮き出るのは骸骨の外にこの野菊もあることを忘れて下さるな。私は四疊半のこの骸骨をゆつくり書いてみたいと思つてゐます。

日が少し廻つてきました、斜めに光線を受けてゐた障子の方へ、少し強くあたるやうになりました。軒の影の外に夏から掛け忘れた簾であらうか新しい影が殖えました。

この山莊に私ひとり十日ばかり生きてゐることをおもふといろいろの興味があります。しかし私ひとりの生命をつなぐ食糧のことを考へても大變です。この箱根の强羅では何もとれません、あなたがうまいといつて二杯食べたあの自然薯だけしかとれません。米も味噌も野菜も卵も醬油も鹽も一切小田原から電車やら自動車で運ばれるのです。炭を一日に半

俵つかひます、私ひとり使ふ炭も亦二千尺の山に登つてきたのです。山の上に生きてゐる私もいろいろなものにめぐまれてゐるわけです。けふのゴマメにしてもカズノコにしても屠蘇にしても、況んやきんとん蒲鉾にしても、並たいていな御馳走ではありません。

人間の力もえらいものです、人間の力よりもえらい自然の力はどこにでも漲つてゐます、殊にこの山上でしばしば自然の力の脅威をうけましたが人間の力も一寸見はえらいものです、あなたを脅かした登山電車やケーブルカーなど、兎に角二千尺の山上まで下駄を汚さずに人間を引張上げるのですから。

いろいろの不便もあります、電報などは東京にゐるより便利です、山下の宮の下の局に電報がくるとすぐ局から電話で宿にしらせてくれますから配達を待つより早いわけです。ほんものの電報は翌朝郵便といつしよに配達されますけれど。火鉢を抱いてとりとめのないことばかり書きまし

た。しかし、これが元日の私のたつた一つの仕事――生活だつたかもしれません。奥さんによろしく。匆々

――一三・一・五――

枯林獨居日暦

くれの二十七日、行李をととのへて箱根へのぼる。行李とて毛布、チース、腸詰、くすり、ホーク、ナイフ、栓ぬき、足袋、寢まき、雜書、ふんどし、ビスケット、和蘭酒など。

強羅につくと老驛長子が微笑をむける。ケーブルで海拔二千尺のところまであがる。女中さんが十能に火種をもつて立つてゐる。枯木林の中に藁屋根の家々がある。その中の一つにはいる。四疊半に六疊に四疊半と臺所、湯殿には溫泉が湧いて硫黄の臭ひがもうもうとこめてゐる。

火鉢に火がおこり藥罐が沸く。行李がとかれて衣桁にも外套がかかる。床の間にステッキが立つ。座蒲團がしかれる。蠅が卓にとまる。今まで人いきれのなかつた貸別荘も、急に生命をふき返したやうに、人間の住居らしい條件がととなふ。

温泉はあつい。熱泉でとても手足を入るべくもない。水道の水を落しつつ湯をかぶる間に、次第にほどよくぬるむ。

電燈の下で御膳をひかへる。食事がすんで女中が母家に去つてのちは、私ひとりである。多年ねがつた獨居三昧に入る。炭を切り、臺所で水をくみ、藥罐をさかんに沸らせる工夫をする。

寢る、小便に起きる。戸を一寸細目にあけると、外にも電燈がともつて枯木の肌が光つてゐる。また寢る、夜中にごうごうと物凄い風の音がする。早雲山から逆落しに此藁屋根をもつてゆきさうな風の音であるが、少しも家に吹きあてない。急角度の山の傾斜の枯林の中にあるこの家には、おそ

ろしい風は吹きあてず、家の空を落ちて谷底に吹きおろしてゐるのであらう。ただごうごうといふ凄まじい音のみを聽く。

朝起きる、雨である。藁屋根に音なく雨がふつてゐる、久方ぶりに藁屋根の雨を味ふ。楢も櫟も皆雨にぬれてゐる。枯葉が落ちつくして、前の徑に沿ふ小さな流れも露はに見える。岩といふ岩は皆な苔をかむつてゐる。苔が裘の如く剝げかかつたのもあれば、雨にぬれて青々としてゐるのもある。

ゆふべ地震があつたと女中がいふ。風の音とおもつたのは山鳴かときいたら、風は風の音で地震は別だといふ。

障子の中にこもる。障子の外は雨である、枯木の林である、苔の岩である。退屈まぎれに障子をあけると、温泉の煙が枯木にまつはつてゐる。雨が温泉煙をしめすから高く揚らないで、枯木の間をもうもうし乍ら谷の方へ消

えてゆく。

晝食の卓に蠅がとまる。海拔二千尺のこの山上に、人も住まなかつた此の草庵に、蠅が一ぴき猶生きてゐるのである。吹いてみたが動かない。御飯を食べ乍らあはれに見てゐると、蠅はもぞもぞと歩き出した、三杯の食を終る頃には私の左手にゐた蠅が卓子の底を這うて右手の角に出てゐた。

晴れ間を强羅の停車場のほとりまでインキを買ひに行つた。かへりは急斜の道を登るので呼吸が切れる。それに便まで催した。枯木の根へかがみかけたが、早雲山と明星ヶ嶽に見すかされるやうで我慢して立ちあがる。徑へ出ようとすると枯蔓が遮る。たうとう蔓をくぐつて出る。

讀書する。鼻血も大へんよくなつた。毎日鼻血に惱まされて、往年のや

うに大出血するかと思つて心配してゐたが、此調子ならよくなりさうである。S博士から山中靜養をすすめられた甲斐があるとつくづくおもふ。念願の獨居のたのしみも隨分に味はへる。借金の身にも幸ひはある。

枯木の群立に驚いてばかりゐちやいけないぞといふ氣がする。もつとよく見ろといふ聲がする。

前庭をみる。枯木ばかりである。その中の一つをよくみる、柳である。苔を幹につけた柳が一ばん目につく。苔も青苔の外に草に似た髯をつけてゐる。この苔の髯は綠青の上を墨でなすつた青さである。それが日を受けて輝いてゐる。幹の肌よりも苔が光線を多分に受け入れてゐる。柳の枝は縱横に伸びてゐる。枝の梢の方はもう肌の色が冷たい。しかし隣の櫟と楢の枝との中に交つて思ひのまま枝を打伸ばしてゐる。櫟は律義者のやうに、楢は、思索者のやうに堅くなつてゐるのに、柳ばかりが世間知らず

のだだつこのやうにのびのびと枝を張つてゐる。その柳の枝のこまごまとした間に一條の繩が根元まで垂れてゐる。古びた繩が何の爲にかかつてゐるかと思つたら、それは繩ではなくやはり柳の枝であつた。新しく伸びた枝であらう、根元のくるぶしのところから一直線に一丈も伸びて、梢の先に屆いてゐるのである。繩ほどの太さ、繩ほどの色に伸びてゐるのであつた。

猶よく見る。楢の小さなのが隣にゐる。物を想ふやうにぢつと立つてゐる。これも肌に苔をつけてゐたが柳のやうに青くない。白綠のやうに白ちやけて苔の形もちがつてゐる。柳のやうに水をあげないから乾びても生きる種類の苔がついたのであらう。この苔の名やら命やら特質やらがわかつたら、どんなに面白からうとぢつと眺める。

楢も櫟も根元に特色をもつてゐる。土に入るところが急に大きくなつ

てどうかすると瘤すらつけてゐる。見た感じが實に根强い氣がしていい。畫にするならば先づ大きなくるぶしを土につけて、夫れから幹を立つべきである。

温泉の流がある。落葉をくぐつてもうもう煙をあげてゐる。落葉も赤ちやけるといふより黑くなつて、寧ろ芥といふ感じがする。それが小流を埋めてゐる。

大きな岩が流をせばめてゐる。岩は皆柳と同じやうな青苔をかぶつてゐる。砂利がある。岩の間にも徑にも落葉の流にもある。どの砂利も一つとして圓くなつたのはない。どれもどれも角を立ててゐる。火山岩なのかまた圓くなるほど水に洗はれてゐないからか、角張つた砂利ばかりである。砂利は珠の如く光らないが、角々に日を受けてゐる。砂利の形が一つでないだけに、一つ一つちがつた影をもつてゐる。

障子の外で鳥がないてゐる。三光鳥である。ツキ、ホシ、ヒとなく、月、星、日だから三光鳥ださうである。しかしホシ、ヒ、ホシ、ヒとしか鳴いてゐない。箱根の瑠璃鳥は天下にひびいてゐるが、一度もきかない。まだ春を待つてゐるのであらう。

風が出て來た。前庭で鳥がないてゐる。きき馴れない鳥なので、そうつと障子をあけてみる。キー、キーとなく、百舌鳥のやうだとおもふ。しかし柳にも楢にも櫟にも鳥の姿は見えない、藁屋根かとおもうて耳をすます。キー、キーとなく。どうも鳴く音は屋根の方角ではない、枯林の方である。

鳥の影は見えないのに音はつづくのである。しばらく四方を見、耳を澄ましたがわからない。障子を閉めてゐると又キー、キーと鳴く。風の音に交つてキー、キーと鳴く。

日ぐれになつて漸く鳥の正體がわかつた。それは柳とも一つの柳の逞

しい枝と枝とが、風に吹かれる度毎に磨れ合うて鳴るのであつた。

月が早雲山の鋭い頂きに落ちかかつてゐた。上の缺けたぼうつとした月だつた。燻銀のやうな艶だつた。早雲山の右の角に白雲が湧いてゐた。これは白銀のやうだつた、白雲は空の半ばを蔽ふやうに湧き起つてゐた。私はそれを枯木越しにみた。また枯木の間を落つる月もみた。

雪がふる。夜をこめて雪がふる。溫泉煙のなかに降る雪は忽ち煙といつしよに消えてしまふ。

朝、枯木は晴々しく雪を飾つてゐた。さりとて柳の相も楢の相も變りはない。薄すらと雪をつけてゐるのみで、苔は一入青さを增してゐた。

熊笹は雪をもたげて青さを見せてゐた。枯草も同じやうに力を入れて雪をもたげてゐた。枯草は薄い茶色をたえだえに雪に滲ませてゐた。

一莖の芒が岩に生えてゐる。大きな磐石の上に芒一莖と少しの苔があるのみである。土が岩にあるとも思へないのに芒が三尺ほども伸びて枯れ乍ら生えてゐる。穂がちつてゐるので莖のみが針金のやうに突立つてゐる。

岩の裂け目に生えてゐるのであらうか、それとも芒を養ふほど苔土が深いのであらうか。生きんとする芒の強さを窺ひ見るには餘りに岩が高く且つ雄大である。

雨戸も錠をしない。玄關も裏口も錠を下さない。がらがらと雨戸をくる。火鉢に火種があればよし、なければ母家から電話で貰ふ。火鉢がなくとも二千尺の山上猶堪へられないことはない。

別莊々々といふけれども、私の別莊は一日二圓五十錢の損料である。

大きな櫟が猶二三葉の枯葉をつけてゐることに驚く。枯葉は蓑蟲のやうに小枝から下つてゐる。高い梢でないから風に浚はれないのであらう。溫泉煙の中にふらふらし乍ら猶落ちずにある。

公園は大磐石を主體として形づくられてある。落書すべからずの札が隨所に立つてゐるけれども、磐石の面に石で落書がしてある。苔も岩の趣も抹殺して己がじし名を掘つてゐる。

枯木の中に下駄の音が聞える。坂を下りてくる白い足袋が見え、友禪の前掛が見える。もう女中さんであることがわかる。顏が見える前に十能に盛つた眞赤な炭火がくわつと見える。

米も卵も野菜も鹽も何も彼も、二千尺麓の町から谿々をのぼつてくるの

だ。この山で出來るのは椎茸と自然薯ばかりである。薪をとることも許されない。

鹽辛がほしくなつて山を下つて買ひにゆく。たんぜんの上に外套をひつかけて。

——一一・一二——

祖母の死と犬

二月十四日、伏見宮國葬の日、祖母が死んだ、さうして支那から犬がついた。

四つの時祖母は私に授戒と袈裟、一日に千文字を習ふこと、一字一石、經文和讃の謄寫、殺生禁斷、路傍の捨草鞋は起して正しくしておくこと、石を路邊にとりのけること、神佛を禮拜すること、箸は八分以上濡らしてはいけないこと、澤庵は三切とつてはならぬこと、茶碗をからから鳴らして食べないこと、肉を食つてはならぬこと、葱を食つたら土壁にいきを吹かけること等、數へ切れぬほどいろいろの習性を私にくつつけてくれた。

目がわるくなつてもぢつとしてゐなかつた、茶を摘んだ、松葉を掻いた、盲目滅法に摘んだり掻いたりした。佛に供へる紙の蓮華もこしらへてゐたがこればかりは目がわるくなつてやめてしまつた。

もう死ぬ死ぬと言ひ言ひ八十一の今年まで生きた。私は「もう會はれないかもしれない」と何度もいつた、洋行する時も、支那へ行くときも、東京へかへるときも、昨年などは三度もお互ひに別れの言葉をのべたのであつた。「もういよいよ思ひ殘すことはないから地藏樣へあげるおかねをおくれ」といつたから私はやつた。「これでもう金に用事はない、あとはお葬式

だが、もう戒名も貰つてあるし、ただ穴へ埋めてくるればよい」とその時いつた。「死んでもかへらない方がいい、もう三度も五度もお別れをしたから」ともいつた。

その祖母が死んだといふ電報を受取つて、しばらくすると犬が東京へつくといふ電報が來た。歸ることもどうすることも出來なかつた、私はこの日公務で地方へ旅立たねばならぬ、代理の人も出せない破目にある旅であつた。

祖母の死と犬の電報と二通もつたままぼんやりしてゐた、そのうちに犬の到著する時間と汽車へ乘らなければならぬ時間とが迫つてきた。鄕里へ電報を打つた、金を送らうとしたら國葬廢廳であつた。

犬が來た。小田をつれてプラットホームへいつたら東京驛一ぱい響きわたるほど高く高く吠えてゐた。貨車のくらやみで眼がぴかぴか光つた

『この犬は箱をかみ碎いたので弱りましたよ』と係員がいふ、下の闘の箱は咬み破つて德山驛の小さな箱に入れられてゐた。私が請取人、小田を保證人にして受取つた、獨逸ポインターの特長は充分備へてゐる、鼻の横を怪我してゐた、箱から出やうと焦つたからであらう。

驛で水を呑ませたらバケツ一ぱい呑んでしまつた。ボスと呼んだ、ボスといふ名は電報でしらせてきたのだ。ボスは東京驛前のビルデングには驚かなかつたが電車には驚いたらしかつた、郵便局で青島と門司と下の闘へ電報を打つた。ボスは青島から來たのである。

自動車にのせたら心得た顏をして飛び乘つた、自動車が『玄海灘』とあだ名さるる東京驛前の惡道路を通る時前へ後へ右へ左へ大ゆれにゆれるとボスは異樣な顏をしたが一二聲高く吠えた、私は耳の横を搔いてやつた。青島には『玄海灘』のやうな惡道路はないので、自動車の動搖にボスは驚いたのであらう、日本にきて始めてボスを脅かしたものは東京の惡道路であ

つた。

家へかへると俳優の小堀君のところから人が來てボスの家をこしらへつつある、今までゐるシロもチビもボスの巨軀に驚いて牙をむきかけたが、ボスが案外おとなしいのでお互ひに尾や鼻を嗅ぎあふまでになつた。

夜はきつと吠えるから運動をうんとさせてもらひたいと小田にたのんで私は家を出た。小田は宿りこむことになつた。祖母の死については妻にこまごまとたのんでいろいろな手順を敎へた。

川越へゆく、武藏野のはてしもない原を走る汽車の中で祖母のことを想ひつづくる。施餓鬼舟の夕ぐれなど殊に私の頭に烙きついてゐる、舟に善男善女が乘り込む、念佛を唱へる、四斗桶の中から鰻やら蜆やら蛤やらいろ

いろの生きものを投げ込む、稱名の聲が起る、鉦が鳴る、折柄海に日が落ちかかる——

川越から鄕里へ手紙を出す、何くれとなく用事やら感想やら、歸れぬ言わけやら、父へ宛て。

三夜目に宅から電話がかかる、犬が毎夜吠えて寢られぬ、近壁より苦情百出、ゆふべ犬はくさりを切り門の戸を咬み破つて脫出した——といふのである。用事も濟んだので又武藏野の落日を拜みつつ放生會の舟をうつつに描きつつ歸る。

ボスは支那山東省青島の田舍の九水といふところにゐたのだ。名山勞山に登つたとき九水で午めしを食つた、そこは觀川臺といつて楊樹の大きなのが列をなしてゐる、川の中に飛石があつて夫れを危げに渡ると觀川臺

である。楊樹を隔てて將軍山といふ怪石奇岩の亂峰に對する、そこに支那人の別莊があつて數寄を凝らしてゐるが今では日本人が借りて敷島といふ料理店をやつてゐる。私どもは雨よけと午飯とかねて敷島に二時間ばかりゐたのである。

鯛のちりを食つた、豆腐は七里の青島から鯛は五里の海岸から二千尺の山越しをしてくるといふことを聞きつつ貴重な豆腐を味はつたのであつた。

青島でウルフドッグを得たいと思つたがなかつたので金井君に賴んでいいのがあつたら送つてくれと言ひのこし支那から歸つたのである、それは昨年の夏のことだ。

今年になつて金井君から、豆腐を食つた敷島の主人が死んだ、主婦は青島

へ出て商賣替をするといふ、ついては青島で愛犬も飼つてゐられないから、いつそ內地の愛犬家へゆづりたい、おたのみのウルフドッグではない獨逸ポインターだがどうだといふのである。私は九水の風景と豆腐の味と主人が死んだといふ情味から一も二もなく引取たい、よろしく賴むと返事した。

青島から電報がくる、船にのり込んだとある、而も主婦は別れ切れず下の關まで犬と同行したとある、二三日すると下の關から電報がくる、支局から電報がくる、箱がないから遲れるとくる、送つたとくる、十四日の午後一時につくとくる、名はボスといふと打つてくる、肉が好き椎茸と筍はきらひで毒になると電報がくる、一日に二食のこと、當分粗食させてくれぬと毒になると打つてくる。——さうして國葬の日となつたのである。

宅へ歸つてみるとボスは巨軀を黄楊の根に結へられて吠えてゐた。もう一高の前で下車した時に吠ゑる聲が聞えてゐた。ボスは私を見て軀を押しつけてなつかしがつた。クヒンクヒンと鼻を鳴らした。

外套も脱がずに顚末を聞いた。妻は當惑した顏をして近所から小言百出の事、毎夜ねられぬこと、脱出したこと、門を破つたこと(成るほど門の戸はバラバラになつてゐた)八時間目に歸つてきた、東京驛までいつて歸つたのであらう、感心な犬だが吠えて啼くのに困ること等。

ボスは舊主を慕つてゐるのである、下の關で舊主と別れて二三時間たたぬ間に箱を咬みくだいて後を慕ひ、東京に來ても焦れ焦れて吠えつづけたのだ、そして脱出したのであつた。しかも舊主の行方を嗅ぎつけ得ずに又私の家に戻つてきたいぢらしさよ。

祖母が、蟲けらすら殺させなかつた私は何だか罪なことをしたやうな氣がして新らしい悔と憂とが又胸にもつれてきた。逃がさう遁がさう心の

ままに――とも思つたがもう遲かつた。ボスのくさりを解いてやつたけれど彼は私の身邊をはなれやうともしない、私が歩けば彼は走る、走つて子供の頭上高く跳ね越えるけれども又風の如くに私の身邊に戻つてくる。私は耳を心ゆくばかり搔いてやつた。

その夜玄關に寢かせたら他の二匹の犬もいつしよに寢た。そして夜が明けるまで――いや私が起すまでボスはぐつすり寢込んでゐたのである。

「クシンともいはないぢやないか」と私は妻を見て笑つた。「ほんとうにボスは人がわるい、とうさんがかへるとワンとも言はない」と妻も笑つた。

「まあボスはバカにしてる」と女中のさくも笑つた。

「ボスはお菓子をやると空中で受けるよ」と子供はいふ、子供はボスが來る早々から馴染んでゐるのである。

その夜祖母の葬式がすんだとの電報が來た。いちにち籠つてゐた夜。

主婦からは長々と手紙が來た。毎日のやうに來た。ボスよボスよボスの母とも書いて來た。寢られない。泣いてゐるだらうとも書いて來た。我儘に育てお氣の毒だ。許して下さい。奥様にもよろしく。女中さまにもボスをよろしくと書いてきた。ボスよ。お母さんは青島へかへりますよ。とも書いてきた。風邪をひくな。便は九水とちがふからどこへでもするなとも書いて來た。

——一二・三——

大正十四年二月二十日印刷
大正十四年二月廿五日發行

著者　小野賢一郎

發行者　東京市外長崎村一八三二　田口鎌次郎

印刷者　東京市芝區櫻川町二番地　近藤喜七

陶器を試る人へ

定價金貳圓參拾錢

發行所

東京市外長崎村

中央美術社

電話小石川三八七九番

振替東京四七六八二番

◇重版美術研究書◇

鍋井克之 風景畫を描く人へ 定價二圓卅錢 送料拾貳錢

藤井浩祐 彫刻を試る人へ 定價貳圓 送料拾貳錢

足立源一郎 人物畫を描く人へ 定價貳圓 送料拾貳錢

榊原紫峰 花鳥畫を描く人へ 定價參圓 送料拾八錢

橋本關雪 南畫への道程 定價參圓 送料拾八錢

川端龍子 畫室の解放 定價貳圓五拾錢 送料拾八錢

村松梢風 本朝畫人傳 定價貳圓五十錢 送料拾八錢

佐久間政一 ロダン研究 定價二圓 送料拾貳錢

中央美術社發行

中央美術社版